ライネス師匠と

煉獄の師匠・清盛

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ロード・エルメロイⅡ世の事件簿とＦＧＯのコラボイベント及びアニメ本編を見て、執筆者がライネス師匠と冒険などしてみたい、と云う欲望が詰まった小説です。

ライネス師匠以外の人物の登場は少ないかも知れません。

話はクトゥルフ神話をメインにしております。読者様のリクエストがあれば、それを元に書きたいと思います。

＊注意事項＊

・日本語として機能していない箇所もあるかと思います。

・圧倒的な語彙力不足

・誤字脱字
・更新が遅いです、限りなく。
・キャラ崩壊、原作の設定無視などあると思います。

目次

The Haunted House
第1話「師匠と弟子」――――1
第2話「マカリオ一家とコービット屋敷」――――7
第3話「黙想チャペル」――――19
第4話「悪霊の家（上）」――――29
第5話「悪霊の家（中）」――――39
第6話「悪霊の家（下）」――――46
番外編
1000UA記念1―1「出会い」
55

The Haunted House

第１話「師匠と弟子」

２０１９年１０月某日　午前９時１４分　時計塔　とある一室

「やっとお出ましか、我が弟子？師匠を待たせるとは……君も随分と偉くなったものだねぇ」

金髪の少女が男に対しイタズラっぽく言い放った。その顔には言葉と同様にイタズラっぽい笑みが浮かんでいた。

「すみません、師匠。師匠からの呼び出しとなる度にどうしても胃が……」

「身体は正直、と云う訳か。まだ…慣れないのかい？君はとんだ胃弱だよ」

「ストレスや不安、緊張状態になると…どうしても」

「ほほう？私に呼び出される事がストレスなのかい？心外だなぁ～、傷つくよ」

少女はそんな事を言っているが心ではそうは思ってない。寧ろ男の反応を見て楽しもうとしている様だ。それに対し男は全力で首と手を振り全力で否定した。すると少女は「冗談だよ」、と小馬鹿にする様に笑った。言われた本人は眼を丸くしポカーンとしていた。

「君は馬鹿しょ……いや、素直だね。気を付けたまえよ?他所なら構わないが…この時計塔には君の良心に漬け込もうとする輩が少くとも居るからね」
「は、はい!気を付けます」
そう男が返事すると「うんうん、素直なのは良いことだ」と少女は頷いていた。
「ところで師匠…用件とは何の事でしょうか?」
「おっと、そうだった。実はだね、君と私でとある屋敷を調べて欲しいと云う依頼があってね」
「調査、と云う事ですか?でしたら…師匠のお兄様とそのお弟子さんの方が……」
「おや?君は私に調査は向いてない、そう言いたいのかい?」
違う、そう男は全力で否定する。その反応を待ってました、と言わんばかりに少女は小悪魔的な笑みを浮かべた。男がそういう反応を知った上で敢えて弄り倒す言葉を言う。
男が師匠の兄と弟子を出したのは数々の難事件を解き明かした、という事を何度も耳にしているからだ。
「冗談は置いといて、君の疑問は尤もだ。依頼主は屋敷の家主でね、彼は我が愛しの兄上に調査を依頼した。が…生憎と兄上は手放せない案件がある様だ。そこで兄上は私と君を推薦し、家主からの依頼をこちらに渡してきた。と云う訳さ。どうだい、納得した

かい？」
「なるほど…偉大なロードからの推薦ですからね。師匠の足手纏いにならない様、頑張ります」
「期待しているよ、我が弟子。さて…依頼の内容は先ほど話した通り屋敷の調査だ。この屋敷はコービット屋敷、と呼ばれていてね。何やら…異様な事が起きているらしい」
「異様な事…ですか？」
　男が聞き返すと少女はコクリと首を縦に振り話し始めた。
　マカリオ一家は２０１７年にこの屋敷に越してきた。来てから1年ほどたった頃、父親が大きな事故に遭い、その後まもなく激しい狂気に陥ってしまった。彼は精神病院に入れられた。それから1か月もしない内に、今度は母親が狂気になった。2人ともわけのわからない事を口走る中で、燃える目をした化物がどうしたとか言っていた。そして屋敷の中で異様な事が起こるのだと言う。2人とも2階の寝室の1つへは絶対に入ろうとしない。
「以上だが……どうかな我が弟子？背筋が凍りついたかな？」
「やめて下さいよ、師匠。怪談っぽく話さないで下さい！」
　男がムキになって口調を少し強くし起こるが、少女は「ごめん、ごめん」と笑いながら返事をした。反省の色は無い様だ。

「家主はこの屋敷を購入する前に、あれは悪霊に取り憑かれた屋敷だと云う噂は聞いていた様だ」
「え!?噂を知っていたのに買ったんですか?何故に…」
「安かったから、だよ。いや～実に単純明快だね」
「いわくつきでも購入するとは……その家主は肝が据わっていますね」
「そうそう。何処かの弟子とは大違いさ」
　そう言いながら少女は男を見る。男は図星だったのか視線を外した。相変わらず少女は男の反応を見て楽しんでいる。
「師匠、マカリオ一家が異様な事を体験した様ですが……肝心な家主はその体験はしたんですか?」
「それについてだが…家主自身は屋敷に取り憑いているものを見た事はない。それに屋敷で起こった異様な出来事も見た事ない。そもそも彼はマカリオ一家の者たちが見た事を正確に知っている訳でもないんだよ」
「と、なると…先ずはマカリオ一家から話を聞く事からですね」
「そうだね、当事者から話を聞くのが一番だ。では…行くとしようか、マカリオ一家が入院している精神病院へと」
「は、はい。しかし、その精神病院はどちらに?」

「ここから車で１５分走らせた所にあるよ。さあ、ついてきてくれたまえ」
少女が言うまま男は少女の後をついていった。

午前９時４３分　車中
「ま、まさか……リムジンに乗れるなんて!!」
男は驚きながらも嬉しそうな口調で言った。その姿は少年そのものだ。
「おや～?随分と興奮気味じゃないか、我が弟子。そんなに乗りたかったなら、いつでも乗せてあげるぞ」
「ほ、本当ですか!?あっ、いえ…そうではなく単純に驚いているんです。リムジンを所有し乗せて頂けるとは…流石はエルメロイ家次期当主のお嬢様、と云ったところですね」
「ほほう!それは皮肉かい、土御門家次期当主の御曹司様?」
土御門家次期当主と呼ばれた男は全力で否定した、皮肉を言ったつもりは毛頭ない。素直な感想を口にしただけだ。エルメロイ家次期当主と呼ばれた少女は彼が皮肉や冗談を言える程、口が上手くない事を知っている。弟子弄りは場所を問わず年中無休である。
弟子弄りが続いている中でもリムジンは走る。やがて、目的地に差し掛かると少女は弟子弄りをやめ仕事モードに切り替えた。

「さて、目的地はもう直ぐだ。今の内に訊きたいことはあるかい？」
「大変恐縮ですが…マカリオ一家の訊きこみは師匠にお願いしていいでしょうか？まだ、発音が…」
「確かに君の英語（イングリッシュ）は米語よりだからね。構わないとも、それくらいお安い御用さ」
「ありがとうございます」
少女が快く引き受けてくれたので男は安堵した笑みを浮かべ軽く頭を下げた。
「下手過ぎる僕の英語を理解し真摯に教えて頂けるのは師匠だけですからね。いつかは…きちんと話せる様になりたいので、その日までよろしくお願いします」
「照れるじゃないか／／／。君がそう思ってくれるならば嬉しいよ、こちらこそよろしく頼みたいな」
弄る側と弄られる側ではあるが…なんだかんだ師匠と弟子の信頼関係はしっかり出来ている様だ。
確認事項を終えると目的地へと到着した。二人はリムジンから降り精神病院を前にした。
「さぁ。行こうか、我が弟子」
「はい。師匠」
ライネス・エルメロイ・アーチゾルテと土御門　初は病院へと足を踏み入れた。

第２話「マカリオ一家とコービット屋敷」

午前１０時３分　病院

ライネスと初はマカリオ一家が入院している病院に来ていた。件のコービット屋敷について情報を得る為である。先ずは夫のヴィットリオ・マカリオから話を聞く事にした。

２人が病室に入り目にしたのは体を丸めブツブツと呟いている中肉中背、中年の男・ヴィットリオだった。

「――――――」

「呆然としてどうした、我が弟子。しっかりしろ」

ライネスが初の背中を軽く叩き励ました。それに対し初は「ありがとうございます」と頭を下げた。満足そうに笑みを浮かべたライネスはヴィットリオの方に向き直り歩みを進めた。

「取り込み中のところすまない、ミスター。お話を伺っても？」

「――――――!!」

ライネスの問いに対しヴィットリオは体を丸めブツブツと呟いているだけだった。

よほど狂気の症状が重い様だ。
返答できないヴィットリオを見てライネスは初の元へ戻って来た。
「残念ながら…ヴィットリオ・マカリオから話を聞きだすのは困難だ。諦めるしかないね」
「狂気の症状がこれ程とは……」
「怖気づいてしまった、などと言うまいな。君は2か月前、私と一緒に日本でこの世のものと思えない事件を解き明かしたではないか。気をしっかりと持ちたまえよ」
「は、はい!!」
「さて、次は…妻のガブリエラ・マカリオから話を聞こうとしよう」
2人はガブリエラの病室に向かい歩き始めた。ガブリエラの病室はヴィットリオの病室の上の階にあった。
病室の前に立ち扉をノックすると返事がしたので入室した。ベッドには2人に対し微笑を浮かべ金髪の少しふっくらした女性が居た、彼女がガブリエラらしい。どうやら意思疎通は可能らしい。
「突然の来訪失礼する。私はライネス・エルメロイ・アーチゾルテ。この男は弟子の土御門　初」
ライネスからの紹介があると初はガブリエラに対し会釈した。

「ミズ・マカリオ。お話を伺いしても？」
「はい…何でしょうか？」
微笑とは対照的に声には元気が感じられなかった。
「貴女方が以前、住まわれた例の屋敷についてお聞かせ願おうじゃないか？何やら……異様な事が起きるらしいね」
例の屋敷と聞いた刹那、ガブリエラの顔から微笑が消え、ビクッと体を震わせた。何かあったのは間違いない様だ。
ガブリエラの口から語られる証言を聞き逃すまい、と初はメモ帳とペンを用意した。
「あ、あの屋敷には悪霊が住み着いて居ます…」
ガブリエラは声を震わせながら語り始めた。それに対しライネスは興味深そうな顔をし耳を傾け、初はペンを走らせた。
「夜中にそのものが私に圧し掛かって目が覚めた事は何度もありました……。ものが怒った場合、皿や家具などを部屋の中で飛ばし――――」
ガブリエラの言葉が途中で聞こえなくなった矢先、彼女の呼吸が乱れ、悶え苦しみだした。
「くっ、不味いな…過呼吸か!?」
ライネスがそう言いながらナースコールすると、直ぐに医師や看護師たちが駆け付け

２人に対し帰る様に促され病室から出された。
「追い出されてしまったね。これ以上ガブリエラから話を聞くのは難しそうだ」
「はい…。ガブリエラさんの言動から噂の信憑性は増しましたね」
「あぁ…。ガブリエラの話を聞いて君はどう思った？」
「そうですね…」
初はメモを見返しながら口を開いた。
「ものが圧し掛かって目が覚めた…と云う点について、金縛りに近い状態に陥ったかと…」
「へぇ～。で、皿や家具などを部屋の中で飛ばしは？」
「ポルターガイスト現象、かと…」
初の話を聞いてライネスは、うんうんと頷いていた。
「ガブリエラが体験した異様な出来事は君が語った通りかも知れない。では、もう一歩踏み込んで考えてみようじゃないか」
「もう一歩、ですか？」
初が聞き返すとライネスは指をパチンと鳴らし微かに笑みを浮かべて言った。
「マカリオ一家に異様な出来事が起こったと云う結果がある以上、原因があるじゃないかってね？」

「原因ですか…？マカリオ一家に…」
「それも一因かも知れないが話を聞くのが困難になってしまっただろう？大元である屋敷について調べてみようじゃないか。私たちは屋敷に関して無知だ」
「なるほど。では、次は…屋敷について調べるんですね」
「あぁ…そうだとも。さて、行くとしよう」

午前１１時１９分　時計塔　図書館

「屋敷について調べるんじゃないんですか？」
「おや～？まさか君は直接屋敷に行くと思ってたのかい？」
ライネスは初を小馬鹿にする様な口調で言った。初は「いえ、そういう訳じゃ…」と否定気味に首を横に振った。
「屋敷についての情報を得る為には不動産屋か図書館とは思っていましたが…まさか、時計塔の図書館とは思いもしませんでした」
「時計塔が魔術師たちによる学院故…その図書館も魔術に関する書類しかないと思ったのかい？それは大間違いだ、ここの図書館は他に比べる事も出来ない程の規模を持つ。情報を得るにはここが一番さ」
「確かに…ここよりも大きい図書館は見たことありません」

「そうだろう?君は交友関係を断ちボッチになってまで、魑魅魍魎が蔓延る時計塔内に関わらず、ここに足を運ぶ程の愛読家だと思ったから知っていると思ったんだが…」

ライネスの言葉が初に突き刺さる。この図書館に足を運ぶのは事実だ。しかし、交友関係を断ちボッチになってまでは言い過ぎでは?と思った。

「ボッチではないと、思いたいのですが…」

「ほほう?」

初の言葉を聞いた瞬間、ライネスは小悪魔的な笑みを浮かべ詰め寄った。

「私以外と交流がある者が居るのかい?是非とも教えてほしいな」

「……」

初は思いつかず沈黙していた、友人と呼べる者の名前が出てこなかった。講義内で顔を合わせ他愛のない会話をするクラスメイトはいる。果たして友人と呼んでも良いのか…。

ライネスは初の言葉を待ちながらニヤニヤしていた。彼の反応を知っているからである。

数秒間の沈黙が初は数分、それ以上に感じた。その沈黙を破ったのはライネスの呆れ声だった。

「はぁ、やっぱりな〜。勉強熱心なのは大いに結構だが、交友関係も持ちたまえよ」

「はい、善処します…」

「よろしい。では、屋敷について多方面から調べよう」

ライネスの言葉を聞き初はこくりと頷き、それぞれ分かれて調べる事にした。

初は複数部の新聞や雑誌を手に取り気になる記事を見つけたので、それをメモする事にした。それぞれの新聞や雑誌の記事には「１９３４年にある繁盛した商人があの屋敷を建てた。しかし、直ぐに病気にかかった為、屋敷をウォルター・コービットと云う人物に売った」「１９５１年にウォルター・コービットは隣人から訴えられた。隣人はコービットの深刻な(悪)習慣と不吉な態度により、この地区から出て行ってもらいたいと訴えたのである」「コービットが裁判に勝ったのは明らかである。１９６５年の彼の死亡時点で、住所がまだそこになっているからである。また、第２の訴訟事件も起きた。コービットが遺言で自分を自宅の地階に埋葬する様に指示したのを、止めさせようとする裁判だ」と書かれていた。第２の訴訟の結果を調べようとしたが、その情報は見つからなかった。

ライネスは屋敷の情報を調べるついでに過去に住んでいた者たちの記録がないのか探っていた。地元新聞をペラペラと捲り目を通すと２点、興味深い記事があった。１つは『屋敷の呪いか!?フランス人の移民一家逃亡』と云う見出しで内容が「１９７９年にフランス人の移民家族が移り住んできたが、酷い事故が続いてしまった為、逃げ出した。

両親が亡くなり、３人の子どもは体に障害を負ったのである」と云うものだった。もう１つは『Ｋ屋敷に潜む呪い』と云う見出しで年表の様な作りになっていた。「・２００８年に別の家族が移ってきたが、彼らも直ぐに病気に憑りつかれた。・２０１３年には長男が狂気に陥って包丁で自殺し、傷心の一家は引っ越した。・２０１６年にまた別の家族が屋敷を借りたが、彼らはいくらもしないうちに直ぐに出て行った。一家全員が同時に病気にかかった為である」と記されていた。これらの記事を見て家主とガブリエラの証言には？偽りがないと確信した。

「すみません、師匠」

「ん、何だい？」

初がメモ帳を見せながら訪ねてきたので首を傾げて答えた。

「この第２の訴訟事件について調べたいのですが…新聞や雑誌には記載がなく」

「ふむ。そうだな、一緒に調べるとしよう。丁度調べ事が終わったからね。民事裁判所の記録を持ってきてくれたまえ…１９６０年代のね」

「はぁ、はい……」

初は何故、民事裁判所の記録を持ってくる様に言われたのか分からないのか曖昧な返事をしつつ、それを探し出しライネスの前に置いた。とても分厚かった為、第２の訴訟事件を探すのは大変そうだと思ったがライネスの表情を見る限りそうでもなさそう

だった。
「何故この記録を持ってくる様に言われたのか分かってないって顔をしているね。冷静になって考えてみなよ、裁判の詳細が一般の新聞や雑誌には記載されないだろう？」
「あっ…それもそうですね」
「全く…君は肝心な所が抜けているな」
　呆れた様な口調で言っているが表情は決してその様にはなってなかった。寧ろ微笑みを浮かべていた。師匠であるライネスからしてみれば、出来の悪い弟子程可愛いものはない、という事なのだろう。
「遺言と云うのは…自分の死後の為に財産の処置などを言い残す事だ。当然だが、生前でしか行えない。だからね…その分厚い記録でも、ウォルター・コービットの死から１年が経過している６６年以降の記録は見る必要はないんだよ。つまり、半分は見なくていいんだ」
「確かに…。でしたら、ウォルター・コービットの死である６５年から遡っていけばいいんですね」
「あぁ。上出来だ、我が弟子。さぁ、見てみよう」
　ペラペラと頁を捲っていくと目的の記録を見つける事が出来た。
　記録には、コービットの遺言を執行したのはマイケル・トーマス神父で、彼は「黙想

チャペル＆ａｍｐ；グランター・オブ・シークレッツ教会」の神父であったと記されていた。トーマス神父が勤めていた黙想チャペルは２０１１年に閉鎖になっているらしい。

「ふ～む、第２の訴訟事件の結果は載ってないが……執行したのはマイケル・トーマス神父とある。これは勝訴、として判断していいだろう」

「じゃあ…あの屋敷の地階には、ウォルター・コービットが埋葬されているってことですか!?」

「掘り起こされてない限りは、ね」

ライネスが目を細め冷静な口調で言った。それに反して初の口調は興奮気味で「異様な出来事の原因は、これのせいじゃないですか?」と言った。

「さぁ、どうだろうね。真実は箱を開けてみないと分からないと云う事さ」

目を閉じ静かにライネスはそう言ったが、初は意味が分からずキョトンとしていた。目を開いたライネスが初の顔を見て「直に分かるさ」と微笑んでいた。

初が「は、はぁ」と漠然と返事をし記録に視線を落とすと、ふと気になるものが書かれていた。

「ライネス師匠…この黙想チャペルと呼ばれる教会、重大な事件を起こしているみたいです」

「ほほう、どれどれ……」
初が記録を指さすとライネスが顔を覗かせた。
黙想チャペルに関する記録には、近所の子どもが行方不明になるのはこの教会のメンバーたちの仕業と警察の手入れで分かった。手入れの最中に、３人の警察官と１７人のカルティストが銃撃あるいは火事によって死亡した、と記されていた。だが、検死は奇妙な程曖昧で情報が伝わってこない。寧ろ、検死官の検死は行われてなかったのではないかと思わせる様な記録だった。教会メンバー５４人が逮捕されたが、８人を除いて釈放されたらしい。
「これは重大な事件だぞ……これは初耳だ。初、続きを読み上げてくれ」
「はい!!マイケル・トーマス神父は逮捕され、４０年の刑を言い渡された。しかし、２０１５年に脱獄し逃亡した……と」
「――――。やはり、聞いた事がない。察するに…誰かが違法な介入をした、と云う事だろう」
「隠蔽しなければならない理由が、あの教会にはある、と云う事ですね」
「そして、ウォルター・コービットと何らかの関わりがある。明日は黙想チャペルの探検だ」
時計の針は１９時を指していた。今からの探索は危険性が増すので明日にする事と

した。そして、図書館から出る前に初は「コービット屋敷とウォルター・コービットに関する経緯」をライネスに伝え、ライネスは「コービット屋敷の住人に降りかかった異様な出来事」を初に伝え共有する事にした。

第３話「黙想チャペル」

午前８時４２分　時計塔　学生寮　初の部屋

初は布団の上で胡坐をかき、手のひらを上にした両手を膝の上に置き目を閉じていた。所謂瞑想をしていたのである。周囲の音を遮る為、イヤホンもしていた。２０分の瞑想を終え、ゆっくり目を開いた時だった。

「おはようだね、我が弟子♪」

「――――――!!」

目の前にライネスの顔があって驚き、そのまま倒れ頭をぶつけた。

「……ッ!!」

「おやおや、大丈夫かい?それだけ盛大に倒れれば目が覚めただろう?」

「大丈夫かい?」と声をかけているがクスリと笑みを浮かべていた。

「し、師匠……いつからそこに?」

ぶつけた頭を擦りながらライネスに尋ねた。

「典型的な質問だな～。いいだろう、答えよう。君が瞑想を始めてまもなくからだよ」

「ずっと…居たんですか?声をかけずに?」

「入室時にノックはしたぞ?尤も君はイヤホンをしていた様だからな、気が付かなくて当然か」
「それはそうですが…いらしたのなら遠慮なく体を叩いてくだされば……」
「ほほう!!そうかい、では…その際は遠慮なく叩くとしよう」
ニヤリとライネスが笑みを浮かべた。これは嫌な予感がすると初は乾いた笑い声しか出せなかった。
「さて、昨日言った通り黙想チャペルへと行こうではないか」
「はい!」
初は立ち上がるとライネスと共に部屋を後にし黙想チャペルへと向かった。

午前10時15分　黙想チャペル
黙想チャペルは曲がりくねった薄汚い通りの突き当りにあった。風雨にさらされ、雑草や木が生い茂っている為、灰色の瓦礫は建築物の壁や土台の跡と云うよりも自然の石の様に見える。
「ここが黙想チャペル、ですか…」
「あぁ、何かあるといいんだがね」
2人は黙想チャペルへと足を踏み入れた。崩れかけた壁を通りかかった時、初が声を

あげた。
「あれは…落書きでしょうか？」
「随分と悪趣味な落書きだな……」
　明らかに最近になって白いペンキで描かれていた。落書きは３つのＹの字から成っていて、Ｙの２つの頂点が両側にある別のＹの頂点と触れ合う様な形で三角形に並んでいる。そうやって出来た真ん中のスペースにはじっと見つめている様な目が描き込まれていた。
「…ッ!!」
　眺めていると額の辺りにチクチクとする様な感じを受けた。
「き、君も頭痛かい？」
「ええ…」
　ライネスも初と同じく痛みを感じていたのか額に手を当てていた。
　２人を襲っているのは、頭痛の様でもあるが、やはり頭痛とは違っていて、チクチクと神経に障る嫌な感じだった。
「くっ…この落書きの仕業だろう、急いで調査をして離れよう。無理そうな時は我慢せず言いたまえよ」
「はい、師匠も…」

２人はチクチクと神経に障る嫌な感じに耐えながらチャペル内を調査する事にした。しかし、調べまわっても見つかるのは花崗岩のブロックとか、半分焼けて腐った木材とか、古いゴミなどばかりであった。

「目ぼしいものは中々見つかりませんね…」

「あぁ…仕方ない、ここは引き返し――――」

ライネスが「引き返して」と言った刹那、ミシッと音を立てて２人は地中へと落下した。土の下に弱った床板があって、それが崩れてしまったのだ。

落下中、ライネスに怪我をさせまいと思った初は、彼女の体を自身の方へ引き寄せ、自分がクッション代わりになる様に下側に回り込み、落下した。

「――――ッ!!ぶ、無事…ですか、し、師匠?」

「あぁ、何とかな……それよりも君は大丈夫なのかい?」

「えぇ…」

「全く君には呆れたよ……その華奢過ぎる体で自分を犠牲にする様な真似をして……どうしてだい?」

「師匠を助けるのに理由は必要ですか?」

「――――」

初の真っすぐ過ぎる視線と言葉にライネスは返す言葉が見つからなかった。返答の

代わりに初の額を指で軽く小突いた。小突かれた初は目を丸くした。
「普段であれば、君を弄り倒す言葉を１つ２つ浴びさせたいが…私でも空気くらいは読むさ。ありがとう、我が弟子。助かったよ」
「……／／／」
ライネスの柔らかい言葉と笑みで初は照れたのか目を逸らした。
「さて…急いでここから出ようと思ったが、この部屋には何かありそうだ」
ライネスが立ち上がりそう言ったので、初も周囲を見渡した。陽の光により部屋の内装が丸分かりになった。
初が地面に手を着き立ち上がろうとした時だった、何かに触れた。触れたものを見ようと視線を移した。
「なッ…!!」
初が驚いた声を出したのでライネスもそれを見た。一瞬だけ驚いた顔を浮かべたが直ぐに目を細めゆっくりと口を開いた。
「遺体が２体。絹のローブを纏っているな…昨日記録で見た火事で死んだカルティストの遺体だな」
「なら、まだ遺体が出てくる可能性も……」
「否定できんだろうな」

ライネスが淡々と言い放った。
記録で17人のカルティストが銃撃あるいは火事で亡くなっている。少なくとも複数体の発見されてない遺体があるのだろう。
初は覚悟を決め立ち上がった。
「さぁ、調査しよう。歩けるかい？」
「はい、問題ありません」
そう言ったものの問題がない訳ではなかった。足は大丈夫だったが左手首から腕にかけ痛みが走っていた。調査に支障がないと判断したのでそう言っただけであった。
調査をしていく内に部屋の隅にキャビネットと腐りかけたデスクが置いてあった。キャビネット内を見ると教会に関する記録を見つけた。
「これは教団の活動に関する日誌だな。どれどれ……。ふむ、ビンゴだ」
「何が書かれていたんですか？」
「ウォルター・コービットがコービット屋敷の地階に埋葬された、と書いてある。本人の希望と闇の中にて待つものの希望による、だと」
「図書館にあった民事裁判所の記録の裏付けが取れましたね。本人の希望は分かりますが…闇の中にて待つものの意味が…」
「ふむ」

ライネスが顎に手を当て眉を顰めた。
「何かを表現する言葉には間違いないだろう。尤もそれが何なのかは分からないが……。君が言った通り裏付けが取れた、それだけで十分だろう」
キャビネット内を粗方調べたのでデスクを調べる事にした。デスクの上には非常に分厚い本が鎖に繋がれていた。
「腐りかけている上、虫食いが激しいな……。内容は期待しないで見て――――!!」
ライネスが表紙に手をかけた時、言葉を止めた。それを見た初が不思議に思い声をかけた。
「どうかしたんですか、師匠?」
「この表紙を触ってみたまえよ」
「はい」
ライネスに言われるまま、初は表紙を触った。
「本の表紙にしては変な感触ですね…しかし、どこかで触った事があるような……」
「この本の表紙はねぇ…人の皮で出来ているよ」
「――――!!」
人の皮、と聞いた瞬間、初は慌てて手を表紙から放した。衝撃のあまり呼吸が乱れたが深呼吸をし呼吸を整えてから口を開いた。ただ、手には何とも言えない嫌悪感が残っ

ていた。
「何故、この様な本が……」
「それはカルティストのみぞ知る、だ。だが、鎖で繋がれた人の皮で出来た表紙……ただの本ではないな」
ライネスは目を細め静かにそう言った。カルティストが何の為にこの本を所有しているのか、常識と云う物差しでは測れない。この本はそのままにしておいた。
地階の調べられる所は全て調べたので2人は落ちてきた穴の下に集まった。
「意外と高い所から落ちたんだな〜、トリムマウ」
ライネスが試験管から水銀を垂らすと、それはメイドの姿で現れた。
トリムマウ…ライネスの使用人兼ボディーガードでエルメロイ家の至上礼装である。
「私と彼を抱え脱出するぞ」
「ＹＥＳ」
そう言うとトリムマウは2人を抱え、軽くジャンプをし地上へと躍り出た。
「ご苦労」とライネスはトリムマウを試験管に戻し、急いでここを後にしようとした。調査を終えたのもそうだが、脱出した安心感からか、チクチクと神経に障る嫌な感じが襲ってきたからである。しかし、敷地内から出ると今までの痛みが嘘みたいにきれいさっぱりなくなった。

敷地から出るとライネスが、やや呆れた様な口調で言ってきた。
「左腕を見せたまえ。君、ずっと左腕を庇っていただろう」
「えっ？」
「いいから、早くしろ！」
ライネスに言われ恐る恐る左腕を見せた。するとため息と冷ややかな声が聞こえてきた。
「酷いなこれは…何故黙っていた？おっと、言い訳は不要だ。君の事だ…私に余計な心配をかけまいと黙っていたんだな？」
初は黙って頷いた。
「はぁ、帰ってから治療と説教だな。コービット屋敷の調査は君の怪我が落ち着いてからだな」

午後１時４分　時計塔
２人が時計塔へと戻るとフードを被った少女が出迎えてくれた。
「お帰りなさい。ライネスさん、初さん。お２人ともお洋服が汚れていますが……」
「ただいま、グレイ。あぁ、少々訳ありでね。それよりも…治療具を持って来てくれるかな？」

「えっ…お怪我をされたのですか？」
グレイが心配そうな視線をライネスに向けた。それに対しライネスは首を横に振り、初の服を捲り左腕をグレイに見せつけた。グレイの目には変色した初の左腕が映った。
「これは……急いでお持ちします!!」
グレイは急いで治療具を取りに行った。
ライネスとグレイによって治療が行われた。初はその際にグサッと刺さる説教と云う名の罵声をライネスから浴びさせ、言い返さず項垂れて聞いていた。それをグレイは苦笑しながら黙って見ていた。
「怪我の具合から見る限り……コービット屋敷の調査は2日後にしよう、いいね？」
「はい…」

第４話「悪霊の家（上）」

午前９時４６分　時計塔　学生寮　初の部屋

初はいつもの日課である瞑想を終えゆっくりと立ち上がった。自身が瞑想中に部屋を訪れた際は遠慮なく叩いて構わないと、ライネスに伝えていたので、叩かれるのではないかと思っていたが叩かれる事はなかった。黙って目の前に居る事もなかった。黙想チャペルの調査から２日が過ぎた今日は、コービット屋敷の調査をする事になっていた。

「特に問題はなさそう…だな」

左腕を見ながらポツリと呟いた。左腕には包帯が巻かれていたが動かす分には支障はない様である。荷物の確認など終えると自室を後にした。足早にライネスの部屋を目指していた。すると、グレイとばったり出会った。

「初さん…おはようございます」

「おはようございます、グレイさん」

朝の挨拶を交わすとグレイの視線が初の左腕へと移った。どうやら心配してくれている様だ。

「お怪我の具合はどうですか？」
「すっかり良くなりましたよ。グレイさんと師匠のおかげです」
初はそう言いながら包帯が巻かれた左腕を見せて軽く振り回したりした。その様子を見て安心したのかグレイは柔らか笑みを浮かべていた。
「そう言えばお礼がまだでした。ありがとうございます、グレイさん」
「い、いえ…拙はライネスさんの指示に従っただけですので、お礼はライネスさんに伝えて下さい」
初が頭を下げて感謝の意を伝えると、グレイは少々照れ臭そうにしていた。
「妬けるな～、我が弟子」
２人が他愛のない会話をしていると、突然背後からライネスの声が聞こえ、初はビクッと体を震わせた。慌てて振り向くとニヤニヤと笑みを浮かべているライネスの姿があった。
「まるで化け物でも見た、と云う顔をしているな」
「あっ…おはようございます、ライネスさん」
「おはよう、グレイ。ご機嫌如何かな、我が弟子？」
「はい、すこぶる調子がいいです」
初が元気そうに返事をすると、ライネスは「どれどれ～」と品定めする様な視線を初

の左腕に向け、ぎゅっと掴んだ。

「――――ッう…!!」

痛みのあまり声にならない声を漏らし、蹲った。蹲りながら「ひ、酷いですよ…師匠」と涙目でライネスに訴えた。グレイは慌てて初に駆け寄り心配そうな表情を浮かべていた。肝心なライネスはと云うと、うんうんと頷きながら軽く笑みを浮かべていた。

「その元気があれば今日の調査は大丈夫そうだな」

痛がる初を余所にライネスは毒づいた。本心ではとても心配していたのである、本心を知るのはライネス自身だ。毒づくは弟子に対する愛情表現の裏返し言えるだろう。

これ以上言い返そうとは思わず初は立ち上がった。グレイだけではなくライネスにも多大な心配をかけた。これくらいされても構わないと思ったからである。

「ライネスさん、その…初さんにご無理をさせない様…に…」

「分かってる、分かってる」

「グレイさん、大丈夫ですよ。師匠は常に気遣ってくれる優しい方なので」

「君……さらっと頬が熱くなる事を言わないでくれたまえ……／／／」

グレイの心配に対しライネスは適当に返事をしていた。傍からみれば本当に適当に返事した様に見える。しかし、そうではない事をグレイも初も分かっていた。だが、敢えて初が口にしたので照れたのかライネスは頬を僅かに赤く染めていた。

「さて、調査に行くとしよう。準備はいいね、我が弟子?」
「はい、分かりました」
「お2人とも、どうかお気をつけて……」
グレイの言葉に2人は頷き時計塔を後にした。その背中をグレイは静かに見送った。

午前10時36分　コービット屋敷
2人はコービット屋敷の前に居た。コービット屋敷はレンガ作りのバンガロー風の建物だった。両隣はもっと背の高い新しいビルになっているので、その間で縮こまる様に建っている。屋敷の正面は道路に面している。
「この屋敷だけ過去に取り残されている感じがしますね」
「あぁ。それに屋敷が両隣のビルの陰になっているせいか、目立たない存在だな」
目立たない上、カーテンのかかった何の飾りもない窓が、中にあるものを頑なに隠している様な、と云う印象を受けた。さらに、何か不吉なものがあると感じた。尤もそれが何なのかは分からないが、初の陰陽師としての経験とライネスの魔眼が語っていた。
正面のドアには1つの鍵がかかっていて、その他にも4つの差し錠で閉められていた。差し錠の方はこの1、2年の間につけられたものの様であった。また、全ての窓が内側から釘付けにされている事に気がついた。

「異様なまでに鍵が多いですね…」
「あぁ…まるで外界との交流を断ち切っている様だ」
　そう言いながらライネスは家主から預かった鍵で開錠した。玄関から真っ直ぐに伸びた廊下があった。玄関付近には階段がないので恐らく廊下の突き当たりに２階と地階に続く階段があるのだろうと考えていたらライネスは屋敷の間取り図を出してきた。
「ふむ、現在地がここだな。いきなり地階の調査は危険だろう、この階から順番に見ていこう」
「はい、分かりました」
　２人は玄関を背面にして左手側の手前の部屋から調べてみる事にした。この部屋は物置部屋であり色々な箱の類やサビついた水槽や古い自転車の様なガラクタが置いてあった。
「ここは物置部屋だな。目ぼしいものと云えば……あの戸棚の中かな」
　ライネスが部屋の右側にあった戸棚を指差した。中には何か入ってそうな雰囲気があったが、板を張って封印されていた。
「中を調べるには、この板をどうにかするしかなさそうですね。釘抜きか何かあれば良いのですが……」
「そんな道具なんて必要ないさ。トリムマウ」

ライネスが得意気に言うと試験管から水銀を垂らすとトリムマウを召喚し強引に板を引き剥がさせた。「なっ?」とライネスは同意を求めているが初は反応に困った。他人の屋敷の物を壊した様なものだったからである。

「と、取り敢えず…中を調べてみましょう」

初が戸棚を開けると、中に3冊の表紙のついたノートの様なものが入っているのを見つけた。それを持ち出しライネスに見せすると「どれどれ」と物色し始めた。

「ふむ、これは日記だな。そして、これを書いたのは屋敷に住んでいた、ウォルター・コービットだ」

「因みに…その日記には何が書かれているんですか?」

「あぁ…召喚などの魔術儀式だよ。尤も全部には目を通してない上、癖がある字だからな…把握には時間がかかる。今は関係ない、これは後回しだ。他の部屋を調べよう」

続いて調べる事にしたのは、先ほど調べた部屋を背面にし直ぐ左手にある部屋だ。内部には主に壊れた家具などで、薪にして燃やすほかには使い道がないくらいに壊れた物ばかりが置いてあった。ここも物置部屋の様であった。特に気になる物がなかったので他の部屋を調べる事にした。

次に調べる事にしたのは、先ほど調べた部屋を背面にし直ぐ左手にある部屋だ。この部屋は土間の様で、オーバーコートを掛けたり、ゴム靴、帽子、傘などを置いておくと

ころだった。石炭の袋も幾つか置かれていた。
「この部屋も外れか…次だ、次」
　少し落胆気味なライネスは部屋から出ると間取り図を取り出し見始めた。
「ほう、居間・食堂・キッチン…壁をぶち抜いて１つの部屋にしているのか」
「正面に見える部屋ですよね？廊下の端から端までとは…とても広そうですね」
「そうだね。じゃあ、調べてみようか」
　最初に調べた部屋の反対側、玄関を背面にして右手側にある扉が居間への入り口で入室した。居間は一般家庭と変わらずあるべき物があった。ラジオ、ソファー、クッションのついた椅子、棚には見かけ倒しの安い置物が並んでいた。
「妙だな……そうは思わないかい、弟子？」
「何がでしょうか……？僕には普通の居間にしか思えないのですが」
　ライネスの質問の意図が分からず初は首を傾げて自信無さげに答えた。すると、ライネスはある物を指差した。
「アレだよ、アレ。十字架に聖母マリア像。君たち日本人には殆ど馴染みない物だと思うがね」
「確かに…あまり馴染みない物ですが。でも、カトリック教徒の方からしてみれば当たり前の物だと思います。それが、何故妙なのでしょうか？」

「部屋を見渡せば分かると思うがね、異様に多いんだよ」
初はライネスに言われた通りに部屋を見渡した。すると、直ぐに気がついた。十字架、聖母マリア像以外にも、その他カトリック教関係の品物が異様に多い事に。
「理由は定かではないが、ウォルター・コービットにしろマカリオ夫妻にしろ敬虔なるカトリック教徒が居たと云う事だろう」
居間を調べ終えたので、居間とキッチンの間にある食堂を調べ始めた。食堂には長いマホガニーのテーブル、作り付けのサイドボード、椅子が7脚あった。テーブルの上には3人分ののテーブル・セットされているが、使われた形跡はない様であった。鍋の中の様子が気になった初が蓋を開けた時だった。
「うッ……!!」
中には腐っているスープが入っていたが、何とも形容し難い匂いに初は嫌悪の表情を浮かべ、口と鼻を手で覆い急いで蓋を閉じた。危うく胃の中身を戻すところだった様だ。
「災難だったな～、我が弟子。大丈夫か～?」
悶絶している初に対してライネスはクスクスと笑いながら、気遣う言葉を投げかけた。大丈夫じゃない、と言わんばかりに首を横に振った。それを見て、ライネスはニヤリと小悪魔的な笑みを浮かべた。

「これを兄上のお土産にしようじゃないか」
「他人の家の物ですから、それはダメだと……」
「おや？君が真に気にするのは兄上の体調ではないのかな？」
「真にって……その言い様ですと体調を崩させようとしているのですか？」
「無論、そのつもりさ。言ったろ？私はね、他人の不幸が大好きなんだ」
　何とも言えない笑みを浮かべたライネスに対し初が困っていると…「冗談さ、他人の不幸が大好きだが…兄上の体調をこんな物で崩そうとは思わないよ。それに見え見えの罠が通用する程、兄上は阿呆じゃない」と言った。
「気を取り直して、キッチンを調べようじゃないか、我が弟子」
　食堂の奥にあったキッチンへと歩みを進めた。見た限りキッチンは普通だった。冷蔵庫、レンジ、オーブン、それに貧弱な食料品置場がついていた。中にはまだ食べられる物もあった。缶詰のスープ、肉、米、数種類のパスタ、自家製のワインなどがあった。野菜などで腐っていなかったものは、ネズミの足跡が残っている為ネズミが食べてしまった様だ。
「君が好きなワインもあるぞ、飲むかい？」
「師匠、先ほども言いましたが他人の家の物ですから…」
「本当は飲みたいんだろう？今は無理だが、調査後に飲ませてあげるぞ」

ライネスの言葉に初は目を輝かせた。その反応に「やはりな」と笑みを溢した。そう言われ慌てて目を逸らすが遅かった、「帰ったら乾杯だな」と追撃をかけられたので素直に頷いた。

キッチンでの調査を終えた2人と1体はキッチンの扉から廊下に出た。直ぐ右手側には2階と地階へと続く階段があった。

「さぁ、次は2階を調査するぞ」

2人と1体は階段を上り2階へと足を踏み入れた。

第５話「悪霊の家（中）」

午前１１時５４分　コービット屋敷２階

２人と１体が２階へと足を踏み入れた時だった。突然ズシンズシンと大きな音が聞こえた。

「――――――!!」

「ウォルター・コービットによる警告かも知れんな。ここからは気を付けて進むぞ」

物音に驚き唾を飲み込んだ初とは対照的にライネスは冷静だった。間取り図にはこの階が４部屋から成っていると記されていた。先ほどと同様に手前の部屋から調べる事にした。

この部屋は普通の寝室だ。ダブル・ベッドと本棚があり、窓からは見晴らしの良い景色が見えた。

「この部屋はマカリオ夫妻の部屋ですかね」

「あぁ、この部屋で夫婦の営みが行われていた様だ。どうかな、我が弟子?ここで子作りでもするかい?」

「なッ――――――!!」

ライネスが突拍子もない事を言ったので初は顔を赤くして言葉を詰まらせた。
「全く初な反応だな〜、君は。童て――――」
「師匠!!この部屋の調査を続けましょう!!」
ライネスの言葉を遮る様に初は慌てて口を挟んだ。その光景にライネスは苦笑し肩を上げた。先ほどの会話を無理やり忘れようと部屋を見渡した。すると、ある事に気がついた。
「師匠…この部屋も居間と同じく…」
「あぁ、異様な程多いな…」
十字架がいくつも置いてあり、ロザリオと聖務日課書がベッドわきのテーブルの上に乗っていた。
「ここまでになると敬虔なるカトリック教徒と云うよりは…」
「異様な出来事に悩まされ、とった行動が神頼み…なのかも知れんな」
ライネスの意見と一致し初はこくりと頷いた。
マカリオ夫妻の部屋にある物を全て調べ終え、2人と1体は退室し隣の部屋を目指した。
夫妻の部屋の隣にあったこの部屋は、小さなベッドが2つ、おもちゃ、鏡つきのタンスがあり、壁には飛行機の絵が貼ってあった。どうやら子ども部屋である様だ。そんな

中、初は飛行機の絵を見ていた。
「飛行機の絵が気になるのかい？男の子はそう云うのが好きなのかな？」
「男の子は乗り物が好きなのかも知れません。僕は消防車が好きでした。乗せてもらった事もあります。それに乗る消防士も好きでした」
「ほほう？命をかけて消火し人命を救う姿勢が、かな？」
「ええ、そうです。身近に居るヒーローですからね。後は英語の発音がカッコいい、と云うのがあります」
「消防士（Firefighter）が？」
ライネスが首を傾げると初は力強く頷いた。
「Ｆｉｒｅｆｉｇｈｔｅｒを日本語で直訳すると…Ｆｉｒｅｆｉｇｈｔｅｒ（炎と闘う者）になります。カッコよくありませんか？」
初が目を輝かせて熱く語った。ライネスは反応に困り苦笑するしか出来なかった。初は厨二病なのかも知れない。
「さて、この部屋では君には変な感性がある事が分かった。次の部屋に行くとしよう」
自分には変な感性がある、と言われ首を傾げながら初はライネスたちとこの部屋を後にした。本人はいたって普通の感性だと思っている様だ。
子ども部屋の隣に位置する部屋にはベッドの枠、むき出しのベッドのスプリング、空

のタンスが置いてあった。使われてないと云う点を除けば、この部屋は他の２つの部屋と同じ様な構造だ。しかし、決定的に違うものがあった。

「うッ――――」

酷い悪臭が漂っていた。あまりの悪臭に初は鼻を摘まんだ。

「くッ――――」

ライネスの魔眼が反応した。この部屋は悪臭だけではなく、何かしらの魔術がかかっている様だ。トリムマウから目薬を受け取り、点けて症状を抑えた。

「調べる時は今まで以上に慎重にな？」

ライネスが初に釘を刺すると初は無言で頷き、各々細心の注意を払い部屋へと足を踏み入れた。何かないかと各々がベッドの下を除いたり部屋の隅を調べていた時だった。初が不意に部屋の入り口へと視線を移すと困惑した表情を浮かべた。それを見かねたライネスが声をかけてきた。

「どうしたんだい？そんな顔をして」

「部屋の入り口の床に…血溜まりが……」

初は指差しながら答えた。ライネスは初が指差した箇所を見ると確かに血溜まりが出来ていた。怪訝な表情を浮かべトリムマウと共に血溜まりへと近付いた。それに初は続いた。ライネスは跪き血溜まりを調べた。

「乾いてない。これは……今出来たものだ。床に私たちの足跡がない以上、私たちがこの部屋へと足を踏み入れた後にだ」

ライネスが冷静に分析した時だった。突然、窓枠がガタガタと云う音を立て揺れていた。

「トリムマウ、窓枠を調べてくれ。慎重にな?」

「Ｙｅ――――――」

「いえ、ここは僕にお任せ下さい」

「分かった、君に任せるよ」

ライネスがそう言うと初は「ありがとうございます」と頭を下げおもむろに紙を取り出した。その紙は人の形をしていた。そして紙を口元に近付けボソボソと呟き息を吹き込むと、紙は宙を舞い仮面を被った人が姿を現した。

「ほほう、式神か」

「はい。擬人式神です、尤も下位の式神ですが」

ライネスに一通り説明すると初は式神に視線を移し窓枠を調べる様に命令した。仮面を被った式神は初の命令に従い窓枠を調べ近付いた時だった。突然ベッドが素早く動き式神に衝突した。衝突された式神は窓の外へと押し出され元の紙に戻った。何が起こったのかその光景から目を離す事が出来なかったが、ベッドがガタガタと動き始め

たので身の危険を感じた。
「初、急いで出るぞ!!」
「は、はい!!」
　2人と1体は慌ててこの部屋から廊下へと飛び出てドアを閉めた。すると、ドンッ!!と云う大きな衝撃音が響きドアが少し歪んだ。ベッドがドアにぶつかったのだろうと、容易に想像する事が出来た。
「1歩でも遅かったら潰されていたかもな」
「これ程敵意をむき出しにし襲ってくると云う事は…」
「この部屋はウォルター・コービットの部屋だろう」
　ライネスの言葉に初は肯定の意味を込めて頷いた。この部屋に立ち入り、あの様な光景を見て体験すれば、この部屋の主が誰なのか直ぐに分かるだろう。
　先ほど襲われたウォルター・コービットの部屋の隣にある部屋を調べてみた。この部屋には、流し台、浴槽、トイレがあった。タオルやその他の物も置いてあり、家族分が揃っていた。また、浴槽の中には黒っぽい水が溜まっていた。どうやら蛇口が緩くなって水が滴り落ちているのが原因だろう。これ以上、調べてもこの部屋から得る情報が無いので廊下に出るとライネスは初に向き直り口を開いた。
「さて、最後はウォルター・コービットが埋葬されているであろう地階だ。覚悟はいいか

な、我が弟子？」
「はい、師匠!!」
ライネス、初、トリムマウは階段を下りて地階を目指した。

第6話「悪霊の家（下）」

午後1時22分　コービット屋敷1階

2人と1体は地階へと続く階段の前に居た。下りる前に傍にあった階段を照らすであろう電気のスイッチを入れてみたが切れている様で灯りが付かなかった。

「踏み外したら下へと真っ逆さまだ。気を付けて進むぞ」

ライネスは初とトリムマウに注意を促すと先頭をきって、地階へと続く階段に足を踏み入れた。すると、階段はミシミシと音を立てた。グラグラとも揺れるので目を凝らして見ると、階段は壊れたものを簡単に直しただけの状態になっていた。慎重に下りて行き何とか着いた地階は、あまり大きくもない部屋で物置部屋になっており、道具類、鉛管、木材、釘、ネジなどが散らばっていた。横の壁はレンガだが、突き当たりの壁側と、階段の直ぐ下にある小部屋の壁は木で出来ていた。

「先ずはこの部屋を探してみようじゃないか。ガラクタ以外の物も見つかるかも知れんしな。そう――――埋葬された、ウォルター・コービットがね。まぁ尤もこの部屋では、その可能性が低いと思うけどね」

「それは木の壁で出来た部屋に居る、と云う事ですか？――――ん？」

初がガサゴソとガラクタを漁りながらライネスの言葉に返事をした時、ある物を見つけた。それは、握りの部分にゴテゴテとした飾りのついた古いナイフで刃は異様に厚いサビで覆われていた。

「師匠、ナイフを――――――」

「伏せろ、初!!」

ライネスの方へ振り向きナイフを見つけた事を報告しようとした時、初の言葉はライネスの警告により遮られた。初は意味が分からなかったが、ライネスは意味もなく大声を出さないと思い、その場に倒れる様に伏せた。その時、頭上を何かが掠めた。過ぎ去ったのを確認すると、起き上がり、それを見た。それは空中に浮かぶナイフだった。

「ナイフが空中に?これは……」

「間違いなく、ウォルター・コービットの仕業だろうさ」

「何とかしないと……」

「私に妙案がある。君は力を使わなくても大丈夫。ただ、見ていればいい」

ライネスと初が作戦会議をしていると、ナイフの切っ先がライネスの方へ向いた。どうやら獲物の標的が決まった様だ。

「分かりました」

初が静かに返事をしたと同時にナイフはライネスの方へ勢いよく飛んで行った。狙

われているライネスは慌てる事なく不敵な笑みを浮かべ、ただ一言――――。
「トリムマウ」
「Ｙｅｓ，Ｍａｓｔｅｒ」
　トリムマウがライネスを覆う様に壁になり、ナイフはトリムマウへと吸い込まれた。ライネスはトリムマウが壁になってくれた事により無事であり、ナイフは水銀で出来ているトリムマウの身体の中で勢いが殺され静止した。当然トリムマウは無事だった。何人も液体を破壊する事は出来ないのである。そして、ナイフを身体から取り出しライネスに差し出した。ライネスもトリムマウも無事でその上、ナイフも回収する事が出来た。
「随分とサビついている、と思ったが、これは血だ」
「それだけ多くの犠牲者が……」
「あぁ。だからさ、私と君で犠牲者の無念を晴らそうじゃないか、我が弟子？」
　ライネスの言葉に初は黙って頷いた。
　次に調べる事にしたのは階段の下にある小部屋だ。早速、中を覗いてみたが空き部屋で何も見つからなかった。
「さて、次はこの壁だな」
　再び元居た部屋に戻り木の壁の前にライネスは立ち腕を組んでいた。

「師匠、強行突破をする気ですか？」
「勿論だとも♪」
　ニヤリと笑みを浮かべたライネスがトリムマウに視線を送った。すると、主人の意図を理解したトリムマウは右腕の形状をハンマーに変化させ思い切り振りかぶり、木の壁に大きな穴を開けた。木の壁に開けた穴に入ると、直ぐ目の前に再び木の壁が立ち塞がっており、人がやっと思いですれ違いが出来る程の幅しかなかった。その分、長さはあったが。
「狭いな……。とっとと壁を破壊してしまおう」
　ライネスがそう言うとトリムマウが右腕を振り上げた。狭いので巻き込まれない様に初が壁をつたい歩きながら離れた場所に移動した時だった。手に凸凹の感触を覚えたので、じっと目を凝らした。
「何をしているんだい？壁はもう壊してしまったぞ」
　初が目を凝らしている間にライネスとトリムマウは、壊し出来た木の壁の穴の中へ行ってしまったが、初が来なかったのでライネスが顔を覗かせた。
「あ、師匠。偶然ですけど、ここに文字みたいのが彫ってありまして」
「文字？」
　ライネスは怪訝な顔をしながら初の下に来て、文字が彫ってある壁を注意深く観察し

た。

「も……く……そ、う」

壁に彫られている文字を指で辿りながら声に出し、ゆっくりと読み上げた。すると、初はハッとした表情を浮かべた。

「黙想チャペル、ですか?」

初が静かに言うとライネスは黙って頷いた。

「ウォルター・コービットと黙想チャペルの関係は私たちの想像以上より深いものかも知れんな」

ライネスが顎に手を当てながら思考を巡らせていると、先程穴を開けた壁の方からトリムマウが声をかけてきた。

「お嬢様、ご覧下さい。ウォルター・コービットと思われる方が横たわっていらっしゃいます」

「間違いない、ウォルター・コービットだろう。いよいよ奴と対面だな。分かっていると思うが、十分に気をつけたまえよ」

「はいっ!!」

初は頷くとライネスに続き穴の中に入った。その中は部屋が部屋が広がっていた。そして部屋の中央に敷いてある藁布団の上にじっと横たわり、死んでいる様に見える、

人の姿があった。ウォルター・コービットだろう。恐る恐る近くと、ウォルター・コービットはゆっくりと上体を起こし立ち上がった。

「――――――!!」

その光景にライネスと初は目を丸くした。

ウォルター・コービットは身長は約１８０ｃｍ、木で出来ている様な感じの窶れて萎びた体をしていた。痩せていて、裸で、大きく燃える様な丸い目をしていて、鼻はナイフの刃の様に鋭く尖っている。髪の毛は１本もなくなっており、歯茎が減ってしまっているので歯が異様に長く見える。彼の体からは鼻を指す様な、甘ったるい様な、胸のむかつく様な匂いが漂ってくる。

「■■■■――――――!!」

言葉にならない声を上げながら、ウォルター・コービットはこちらに襲いかかってきた。彼の鋭いかぎ爪が初の胸部を狙い振り下ろされた。

「……!!」

咄嗟に半歩下がったのが幸いし、かぎ爪による攻撃は外れ初は無傷で済んだ。ウォルター・コービットの攻撃は大振りだった為、隙が大きく脇ががら空きだった。そこを右腕の形状をハンマーに変えたトリムマウが振りかぶり攻撃を命中させた。攻撃を受けたウォルター・コービットは横へと大きく吹き飛ばされた。

「初…君の出番だ。陰陽道を以て奴を退治するんだ」
　ライネスの言葉を聞きウォルター・コービットを倒してない事を直ぐに把握し頷いた。初はウォルター・コービットが飛ばされた方を見ると彼は既に立ち上がっていた。尤もトリムマウの攻撃を受けた脇は欠損していた。スーっと息を吸い、ハーっと息をゆっくりと吐き出し、人差し指と中指を手刀と見立て空中へと突き出した。それを見たウォルター・コービットは初の方へと歩を進め距離を詰めて来た。
「朱雀・玄武・白虎・勾陳・帝台・文王・三台・玉女・青龍」
　単語毎に手刀で空中で四縦五横の格子を描き九字を切った。格子は1本1本が鋭い刀になっており、それがネット状のもので、こちらに迫ってきたウォルター・コービットと接触し、彼をバラバラに切り裂いた。そして、バラバラになった体は塵となり消えてしまった。
「見事だ、我が弟子♪」
「ありがとうございます、ししょ……ぐふッ――――!!」
　ライネスが初に対し称賛の言葉を投げかけ初もそれに応えようとした時、吐血し卒倒してしまった。
「くッ。私としたことが失念していた。トリムマウ、初を頼む。急いで戻るぞ」
「Ｙｅｓ，Ｍａｓｔｅｒ」

午後６時５２分　アーチゾルテ邸

初が目を覚ますと、白い天井…ではなく、茶色の天井が視界に入った。ゆっくりと上体を起こし、手を頭に当て、ぼんやりと倒れる前の事を思い出すのと同時に今の状況を把握した。彼はベッドに寝かされていた。すると、ガチャリとドアを開けライネスが入ってきた。

「目が覚めた様だね、気分はどうだい？」

「ええ、落ち着いています。その……ご迷惑をおかけしました」

目を伏せ俯きながら初は謝罪の言葉を述べた。「気にするな」とライネスは言いながら初と話しをしやすい様に椅子をベッドの隣に置き座った。

「私の方こそ…すまなかったな、君の体調を把握していたのに関わらず」

「いえ。僕の体調は生まれつきのものですので。師匠が気に留める必要はありません」

「そう言ってもらえるとこちらとしても助かるよ。さて、君が倒れていた間に何があったのか情報を共有しておこう。結果から言うと依頼は達成、家主は大喜びさ。報酬は頂いた上、君が飲みたそうにしていたワインも手に入れたぞ」

依頼達成、と云う言葉を聞いて初はほっと胸をおろしたが、ワインを手に入れた事に

関して苦笑いをしていた。

「それと――――」

急にライネスは声色を変えて初に迫り1枚の写真を差し出した。

「真意は分からないが…それは君に近いものだろう?」

「天宮図(ホロスコープ)、ですね……。六壬占と呼ばれる陰陽師にとって必須の占術。その占術で使う天地盤に等しい関係にあります」

初は写真に写し出された天宮図を覗き込み、さらに口を開いた。

「これを天地盤に当てはめれば、多少は天意を知る事が出来るかも知れません。今すぐ調べますか?」

「いや、今はいい。今は素直に依頼を達成した事を喜び乾杯しよう。調べるのは、また今度だ」

ライネスが柔らかい笑みを浮かべると、初は頷いた。そして、トリムマウにワインを持って来させ乾杯した。尤も倒れたばかりの初は1杯しか飲まなかった。酒豪であるライネスは初を気遣い自身も1杯しか飲まなかった。

「今日だけは泊まっていくといい。ゆっくり休みたまえよ、我が弟子」

「はい、お言葉に甘えさせて頂きます」

番外編

１０００ＵＡ記念１―１「出会い」

２０１９年３月某日　日本　土御門宅

「これで忘れ物はないな……」

オレはリュックサックとスーツケースの中身を確認していた。何故かって？それは大学の春休みを利用して憧れのイギリスへと旅行することになっていて、忘れ物があったら大変だからだ。昔から些細な事を気にする性格だからな、何度も確認した。

「よしッ!!」

満足するまで確認を終えるとリュックサックとスーツケースのチャックを閉めた。すると次は別の不安が頭を過ったんだ。英語をきちんと話せるかだ。一応、英検３級は持っているからな中学生レベルの英語は話せるが……。まぁ、何とかなるだろう。外国人はちゃんと聞き取ってくれると聞いたことがあるしな。

コンコン、とドアをノックする音が聞こえ開けたら父親が居た。

「初、これも持っていくといいよ」

「六壬式盤を？」

「あっても困らないだろう?」
「うん、持っていくよ」
式盤を受け取ると父親は出ていった。そして、オレは受け取った式盤をスーツケースの中に入れた。これで全ての身支度は終えた筈。あとは空港に行くだけだ。リュックサックを背負いスーツケースを引きながら家を後にした。出る時に「行ってくる」と父親に声をかけたら「気をつけて楽しんできてな」とありがたい言葉をもらった。
空港に着き飛行機への搭乗手続きもスムーズに進み、イギリスへと飛び立った。初めてのイギリス旅行で不安もあったが期待も同時にしていた。到着にはかなりの時間がかかるの事を知っていたので眠る事にした。目が覚める頃にはイギリスに着いているんだろうな〜。

午後4時8分　イギリス　某所
オレは旅行会社で選んだ旅館の前に居た。この旅館はハリソン一家が所有する邸宅を宿泊施設に変えたらしい。今もこの旅館はハリソン一家が経営していて、森の奥にひっそりと建っている事から穴場スポットとして人気があるらしい。はぁ〜、凄いと眺めていると中から茶髪で20代前半のメイド服を着た人が出てきて、こちらに気付き近付いて来た。この旅館の使用人だな…恐らく。

「こんにちは、お客様。私は当旅館の使用人を務めております、ボニーでございます。お客様のお名前をお伺いしても宜しいでしょうか?」

おっ……これが本番の英語か。名前がボニー、と云う使用人さんらしい。ボニーさんはスカートの裾を軽く持ち上げ頭を下げる優雅な挨拶をした。はぁ～絵になるな。おっと…見とれている場合じゃない名前を聞かれているんだよな?緊張するけど喋らないと…!!

「土御門　初です。下手な英語で申し訳ありません」

これでどうだ?伝わったか…?オレが不安そうにしていると、ボニーさんは逆に柔らかい笑みを浮かべていた。

「土御門　初様でいらっしゃいますね。貴方様の英語は伝わっております故、ご心配はなさらぬ様。もし、不安でございましたら…日本語で話しかけて頂いても問題ございません」

「に、日本語?!」

なっ―――!?ボニーさんは流暢な日本語で返答してきた。オレは呆気にとられた。

「宿泊なさる日本人のお客様は少なくないので…当旅館の使用人全員は日本語を話す事が可能でございます」

「なるほど」

「ですので、先ほども申した通り…土御門様も何かお困りの際はご遠慮なくお声がけ下さいませ」
「はい、助かります」
日本語での会話が可能とは……少しは心の重りが取れた気がする。実に運がいい。
「では、お部屋へご案内致します。外ではお身体が冷えてしまいますので」
「お願いします」
ボニーさんの言う通り、外はとても寒かった。北海道並みだと聞いていたが、その通りだと思った。尤も北海道には行った事ないが。
オレはボニーさんに導かれ旅館の中へと入った。
「――――!!」
言葉を失う、と云うのはこの事だと理解した。中は外観からでも察する事が出来る様に豪華絢爛だった。そして何より目に入ったのは壁にかけてあった女性の肖像画だった。オレは思わず足を止めてしまった。
「如何なさいましたか、土御門様?」
「いや…この肖像画の女性が気になってしまって」
「このお方はアリス様。ハリソン家初代当主・ジョージ様の奥方にして、魔女でございます」

「ま、魔女？」
「えぇ、始まりの魔女と呼ばれております」
　大層な２つ名だな～。しかし、始まりの魔女と言われる所以は何故なんだろう？人の道を外れた行いをして、始まりの魔女と呼ばれているのかな。
「魔女と呼ばれる程相当酷い行いをしたんですか？」
「いえ、何もしておりません。魔女と呼ばれると言うよりは彼女は正真正銘、本物の魔女です」
　本物の魔女、か。ボニーさんの目や言葉から真剣さが伝わってくる。嘘ではなさそうだ。日本にも魑魅魍魎、と云った存在もいるからな。
「アリスと云う方が魔女だと分かりました。何故始まり、なんですか？」
「この世に存在するありとあらゆる魔術の源流の使い手で、全ての属性を有していらっしゃるからです」
　当たり前だが会った事がないが…全ての属性を有しているとは…魔道については疎いが陰陽道で言えば木火土金水の属性を持つ術が使える、と云う事だ。間違いなく大物だろう。などと、考察していたが…ふと我に返った。
「あ、すみません…ボニーさん足を止めてしまって…。色々と教えて頂きありがとうございます。その…部屋まで案内してくれると幸いです」

「畏まりました。こちらへどうぞ」
ボニーさんに案内され部屋へと向かった。部屋の場所は階段を2回上がり東側だった。つまり、3階という事だ。
「こちらの部屋をお使い下さいませ」
「ありがとうございます」
礼を述べてオレは部屋へと足を踏み入れた。入れば、おぉ～と感嘆した。そこまで広くはないが…とても趣のある感じで淡く輝く明かりが灯っていて、とてもリラックスが出来そうな部屋だった。ゆっくり、のんびり過ごせそうだな。
「夕食は19時より1階の食堂となっております。18時55分にお迎えに上がります。それまで、ご自由にお過ごし下さいませ。当館は散策自由でございます故」
「分かりました。ここまでありがとうございます」
オレが礼を述べるとボニーさんは頭を下げて自分の持ち場へと戻った。散策自由なのか…今は4時半。2時間以上も部屋でボーっと過ごすよりは出歩いてみるか。他の宿泊客とは出会いません様に、あまり英語を喋れないからな。
貴重品を持ち部屋に鍵をかけてオレは行くあてもなく、ぶらぶらする事にした。館内を散策にしても他の宿泊客に迷惑がかかるかも知れないし、外に出るにしてもとても冷えるからな…。どうしたものか。そうだ、エントランスホールの端で音楽を聴きながら

本でも読んでいるか。直ぐに部屋に戻り本と音楽プレイヤーを持ち出し、エントランスホールに向かった。当たり前だが、部屋には鍵をかけた。

　エントランスホールに着けば端に位置するソファーに座りイヤホンを付け音楽を聴き、本を開き読み始めた。これで周りを気にする事なく時間を忘れる事が出来るな。読み始めてどの位の時間が過ぎたのか分からないが、不意に肩を軽く叩かれオレは身体をビクッとさせ顔を上げた。

「やぁ、驚かせてすまないね」

　オレの目に映ったのは同じ日本人の中性的な好青年だった。声を聞かなければ女と間違うかも知れない。年も大体同じ位な感じがした。何なんだ…この人は……。取り敢えずイヤホンを取って話を聞いてみる事にした。

「僕に何か…ご用ですか？」

「少し、私の暇潰しに付き合ってくれないか？」

　などと言いながら対面のソファーに腰をかけた。

「構いませんが……貴方は一体……？」

「これはこれは失礼した。私は馬林（まばやし）翔（しょう）。しがない占い師さ。気軽に翔兄さん、と呼びたまえ」

　……。とてもマイペースな人だな、馬林さんは。

「土御門　初です。大学生です」
「ふ～む、土御門…土御門……」
　オレの名字を繰り返し読み上げて何なんだ？馬林さんは顎に手を当て考え込んでいる仕草をしているが。
「ひょっとして……君は陰陽師・安倍晴明の子孫で土御門家の次期当主かな？」
「――――――!!」
　土御門と云う名字を聞いて安倍晴明の子孫、と答える人はいなくはないが歴史や陰陽師に興味を持たないと知らないだろう。けど…この人はオレの立ち位置までを知っているのか？
「そう怖い顔をしないで、落ち着く落ち着く。占い師と云う看板を背負う為には占い関係の勉強は必須さだろう？それで陰陽師を知った。その存在に興味を持ち調べていく内に君の存在と出会った。私はねぇ、君に興味があるんだよ」
　えっ…この人何て言った……？オレに興味がある？危ない人なんじゃ……
「馬林さんって…そっち系の人ですか!?」
「いやいや、私は両方いけるよ♪それに…馬林さんではなく、翔兄さんと呼びたまえ。無理ならば、翔さんと」
　ま…し、翔さんは笑顔で答えた。間違いない、この人は危ない人だ。でも……偏見は

よくない様な。
「翔さんはご自身の性癖を暴露する為に、暇潰しの相手を探していたんですか？」
「いや、違う」
　先ほどまでの調子いい語気とは対象的に翔さんの口調は冷静になった。
「私は占い師。私の占いは当たる。過去も未来も視える。だからこそ君に伝えなくてはいけない事がある」
「何ですか、それは？」
「私は此処で死に、此処で生き返る」
「えっ？」
「この旅館で命を落とし、生き返る。と言ったんだよ」
「意味は分かります。しかし…それを信じろ、と？」
「私の占いだからね、必ずそうなる。そう言っても信じてもらえないだろう？だからね、君に占ってもらいたいんだよ。陰陽師に伝わる六壬占で」
　翔さんは真剣な眼差しでオレに訴えた。それに六壬占を知っているとは…陰陽師に興味があると言う言葉は本当なのか。六壬占で翔さんが言った様な結果が出れば信じてもらえる、という魂胆だろう。しかし…生き返るとは、どう云った術で？
「分かりました。では式盤を持って――――――」

「いや、君の部屋に行こう」
「ぼ、僕の部屋ですか？」
「そうだとも。占いの結果を聞かれたくないのさ。何か都合の悪い事でもあるのかい？」
「いえ…特にないですが」
初対面でよく他人の部屋に行き来出来るな翔さんは。まぁ、この人なら余計な事はしない筈…いや、する？常識的に考えてしないよね？いや、そもそもこの人に常識はあるのか？
色々と不安要素が拭い切れないがオレと翔さんはオレの部屋へと向かった。